

氏名 庄 盛 敦 子

学 位 の 種 類 医 学 博 士

学 位 授 与 番 号 乙 第 4 5 6 号

学 位 授 与 の 日 付 昭和46年 3 月31日

学 位 授 与 の 要 件 博士の学位論文提出者
(学位規則第5条第2項該当)

学 位 論 文 題 目 いわゆる境界例についての臨床的研究

論 文 審 査 委 員 教授 高 坂 睦 年 教授 西 本 詮 教授 小 坂 淳 夫

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

神経症、性格異常あるいは精神分裂病のいずれとも診断の困難な、いわゆる境界例についての概念および症候論について文献的展望を行った。

つぎに対象として、昭和41年1月より昭和43年1月迄の2年間に、岡山大学精神科に入院歴をもつ17例を選び、臨床症状、対人関係における特徴などより次の3型に分類し、それぞれの位置づけを試みた。

1. 仮性神経症型

不安、恐怖、強迫症状あるいは神経衰弱症状などの多彩な神経症症状が前景を占めているが、対人場面での反応、思考障害、ロールシャッハテスト知見などより、その本質は分裂病に近いものと考えられる。

2. 性格偏異型

漠然とした神経衰弱症状や関係注察念慮などを訴えているが、中核となるのは精神病質人格あるいは simple schizophrenia との鑑別が問題となるような性格偏異である。

3. 単一症状型

自己表情異常感、醜形恐怖、匂いに関する妄想様観念などが長期間単一症状的にみられるもので、人格障害の程度も軽度で、症状発現が特定の対人場面と結びついており、対人恐怖症の周辺領域にあるものと考えられる。

備 考 (昭和43年12月 岡山医学会雑誌 80巻 11. 12号掲載)

論文審査の結果の要旨

精神科領域において精神分裂病を理解することは最も必要で且つむづかしい問題である。著者は精神科において経験した17例の問題ケースを、分裂病と神経症及び性格異常とのいわゆる境界例とし、これらを仮性神経型・性格偏異型・単一症状型の3型に分題し、夫々の特徴をあげ、他の諸家の論文と比較考察している。いわゆる境界例は分裂病を既知のものとし、それとの境界について論ずるという基本的に問題となる点はあるが、このような作業を重ねていって始めて分裂病の概念も定まるもので、この種の仕事として充分価値がある。

よって、本研究者は、医学博士の学位を得る資格があると認める。